令和七年度入学式　式辞

今年も春が巡ってきました。日に日に力強さを増す日光に照らされ、与論ブルーの海が輝きを放つこの季節に、多数の御来賓と保護者の皆様の御臨席を賜り、鹿児島県立与論高等学校第五十九回入学式を挙行できますことは、私たち教職員にとってこの上ない喜びであり、厚く御礼申し上げます。与論ブルーの如くキラキラと輝く希望を胸に抱く四十五人の新たな仲間を迎え、与論高校は今日から、在校生も含めたこのメンバーで走り始めます。

新入生の皆さん、まずは入学おめでとう。義務教育を終え、希望すれば島外の学校に進学する選択肢もあった中で、本校への進学を決断してくれたことに私たち教職員は敬意を表するとともに、この与論島の未来を創造する人材になるべく、先輩たちとともに切磋琢磨してくれることを期待しています。

さて、本校は、町民の方々の切なる願いの下に、昭和四十二年、県立大島高等学校与論分校として開校しました。昭和四十六年には県立与論高等学校として独立し、これを機に校章や校歌などが制定されました。

平成十二年には与論中学校との連携型中高一貫教育校の指定を受け、新たな歩みを刻みながら、一島一校の高等学校として、その役割を確実に担ってまいりました。

令和となった新しい時代においても、よき伝統と爽やかで落ち着いた校風を継承しています。その本校で、新入生のみなさんが勉学や学校行事などに真摯に取り組み、充実した高校生活を送ることを期待します。

本校では令和二年度から、「予測が困難な時代を主体的に生き抜く力を持った生徒を育成する」ことを重点目標に掲げ、教育活動の充実・改善を図っています。本校はこの重点目標の「予測が困難な時代を主体的に生き抜く力」を次のように捉えています。

それは、「学ぶことの意義を理解し、未知の状況の中で、正解のない問いに対しても、よりよい解決策を見出すために、多様な人々と協働しながら、粘り強く取り組もうとする力」です。

体育館前方の右上に、本校の校訓「好学・創造・親和・不屈」を掲げています。この校訓は、先ほど述べた「予測が困難な時代を主体的に生き抜く力」に重なっています。

つまり、「好学」は、学ぶことの意義を理解することから始まります。「創造」は、未知の状況の中で、正解のない問いに対しても、よりよい解決策を見出すこと。「親和」は、多様な人々と協働すること。「不屈」は、粘り強く取り組もうとする力を意味します。

すなわち、本校の校訓「好学・創造・親和・不屈」は、これからの時代を生きる若者に必要とされる「予測が困難な時代を主体的に生き抜く力」を表すキーワードそのものなのです。

本校の草創期に校訓をつくった先達は、未来でも変わらずに必要とされる資質・能力を

見据えていたと言っても過言ではありません。その校訓を具現化すべく、新入生の皆さんがたくましく成長することを願っています。

皆さんにお伝えしたいことが二点あります。一点目は、「自分のルーツに誇りを持つ」ということです。与論島にルーツを持つ自分に誇りを持て、ということです。これは与論で生まれたかどうかだけが問題ではありません。当然、与論で生まれ育ってきたからそのまま高校まで来たという人はいるでしょう。そういう人が大半かもしれません。しかし、中には小学校・中学校・高校のいずれかのタイミングで様々な理由で与論に来た人もいると思います。理由はどうあれ、今ここに皆さんが座っているということに意味があるのです。ここに座っている全員に与論島に対するルーツが今生じていると考えてください。皆さんはただの偶然で与論高校に入学するのではない。今後三年間の本校での学びの中で、与論だからできること、与論でしかできないことを、校内・校外の様々な活動でとことん追求してもらいます。全国には今、国公私立合わせて約四千八百校の高校がありますが、本校でしかできない、本校生にしか感じられないことを探究活動などで極めてほしいのです。

例えば、皆さんは与論中学校時代、修学旅行で与論の先人たちが福岡県の大牟田に集団移住し、炭鉱労働に従事された歴史を学びましたね。「黒いダイヤの涙」を流しながら故郷を思い、くじけず力強く生き抜いた先人たちに思いを馳せて、今自分が普通に生活できていることを有り難く感じたのではないかと思います。だからこそ今自分が、与論島のために、世の中のために何ができるかを考える。こういうことも、与論にルーツがあるからこそできること、与論にルーツがなければできないことの一つなのです。

皆さんにお伝えしたい二点目は、「人間力」の偏差値を高めて欲しいということです。「偏差値」といえば普通、「学力偏差値」ですよね。試験の平均を出して、その平均値・中間値を五十として、上位と下位にどれだけ離れた位置に自分がいるかを把握する指標です。例えば、最難関の東京大学では七十五ぐらいでしょうか。ただ、「学力偏差値」といっても、今後皆さんが気にすることになる数値は、自分の志望大学等の入試に必要な教科科目の「偏差値」で、体育や芸術、家庭科などは含まれていない、ごく一部の力しか表していないということを忘れてはなりません。これらの数値も大事な「人間力」の一部ではあるのですが、これだけでその人の価値が全て決まるわけではない。私がいう「人間力偏差値」とは、学校で教えられる全ての教科の力は大前提として、それ以外に社会の常識、礼儀、誠実さ、忍耐力、決断力、交渉力、積極性、協調性、包容力、共感力、優しさ、思いやり、コミュニケーション能力など、人間が社会生活を営む上で必要となる様々な能力を合わせたトータルとしての人間の力です。例えば学力偏差値が七十五あったとしても、他の「人間力」の数々の項目が四十しかなければ、トータルとしての「人間力偏差値」は軽く五十を切ってしまうということです。逆に「学力偏差値」が平均値五十ぐらいでも、その他の項目が七十五ぐらいあれば、トータルとしての「人間力偏差値」は七十を超えてくる。この「人間力偏差値」を探究の時間「ゆんぬ」をはじめ、学校内外の諸活動で積極的に高めてほしいのです。これまでの卒業生の「人間力偏差値」がどんな進路先で評価されたのかは、学校ホームページの進路状況や私の校長通信第十号で確認してください。今度は新入生の皆さんが、本校の歴史を塗りかえる番です。期待しています。

学校の価値は、生徒数の多さや施設設備の充実、制服のかわいさなどのような表面的なものだけで決まるものではありません。生徒個々が今自分が存在している環境に意味を見出し、学校内外にあるあらゆる機会で、自分の存在価値を高める学びに、前のめりの姿勢で挑む。それができる与論高校に自信と誇りを持ってほしいのです。全国四千八百の高校そのものに優劣はありません。重要なのは、それぞれの高校に在籍する生徒たちが、親鳥から餌をせがむヒナ鳥のようにただ口を開けて与えられるものを待つのではなく、自ら主体的に自分に必要な学びをつかみに行くことなのです。ですから、怠け心から手を抜いている様子が見受けられれば、こちらから厳しく叱責することが当然あります。高校は自分を鍛えて成長させる場所であり、自分を甘やかして好きなことだけをする場所ではないことを忘れてはいけません。

保護者の皆様、お子様のご入学を心から歓迎いたします。今、皆様の心の中に浮かんでいるお子様は、いつ頃のお子様でしょうか。寝返りしか打てない我が子が初めてつかまり立ちをし、自分の意思で立ち上がろうとしたことに感動したあの頃でしょうか。夜中に高熱を出し、泣きじゃくる我が子を、どうすることもできず、不安なままただ抱っこしてあやしていたあの頃でしょうか。それとも，思春期になり、急に言葉数が減り、よそよそしくなったことに一抹の寂しさを感じたあの頃でしょうか。

そんなお子様がこんなにも大きく成長しました。そして、この与論高校で、さらに大きく成長します。この子どもたちが生きていく時代は、「人生百年時代」、「ＡＩの時代」、「超高齢化社会」、そして「二十二世紀」。これまで誰も経験したことのない、さらにはモデルとすべき生き方もない、そんな社会です。そこに私たち親や教師は既に不在であり、助けてあげることはできません。だからこそ本校は、「予測が困難な時代を主体的に生き抜く力を持った生徒を育成する」ことを重点目標に掲げ、教育活動の充実・改善を図って参ります。「与論高校で学んでよかった」と実感していただけるよう全力で支援します。生徒たちには、「大きな子ども」ではなく、「小さな大人」として接して参ります。

そのためにも学校と家庭がそれぞれの役割を果たし、連携を密にしていくことが重要であると考えます。保護者の皆様におかれましては、本校の教育方針について御理解いただき、御協力をお願いいたします。

終わりに、新入生の皆さんの活躍を心から期待するとともに、本校の教育活動に対し、日頃から温かい御理解と御支援を頂いているすべての皆様に感謝を申し上げ、式辞といたします。

令和七年四月八日

鹿児島県立与論高等学校
校長　大倉秀心